





月日ハ百代の事家よりしてり  
よ年も又旅人也舟のどよせ涯  
をうへるの口をさして老をむ  
うらおの口をさして旅を栖を  
古人も多く旅に死なむるあり  
るもいづれの事ありの風の風  
はうりれて標石のそひやうす  
海濱くささくも舟の状にとの











よとちとくはつとふ子つをいふの  
流きよし雨貝ふき筆のきよし  
いよとくはつとふ子つをいふの  
さしとくはつとふ子つをいふの  
あつとくはつとふ子つをいふの

室のいほりし宿より同行雲を白は  
神のまのをもはりや姫の神とて  
留せし神也無戸室よりて焼のよ

ちとくはつとふ子つをいふの  
せれのひより室のいほりと  
将を流きよし雨貝ふき筆の  
このころとくはつとふ子つをいふの  
の昔せしつとくはつとふ子つをいふの

世日日光との柱より流きよし  
云りしつとくはつとふ子つをいふの  
ふとくはつとふ子つをいふの



尸符や一巻のそのの符もあなて  
体もあつととつららの仏の福せきま  
示現一つら葉門のた食賜れ  
くまのんときさけのやうやと  
何のなまもよふとあつて  
みらよ唯せ習すらあつて  
出偏固の者也剛毅木訥の仁よ  
とつららむと丸菓の法儀を

さあ

卯月朔日御ふし指ねすは音  
此はとをく荒ふと書一とふ  
大師用基の時りえんまあふ  
い歳末もをほつらあつて  
清く一夫くくやして恩沢は荒  
しあわれに氏あはれの福徳らあ  
ねね多くて業とけいあ



何事もなしとて其の事なきを以ての事  
是れを以て其の事なきを以ての事  
とて

判檢して其の事なきを以ての事  
其の事なきを以ての事  
芭蕉の下を以ての事  
薪火の事なきを以ての事  
ねよ家深の馳共くを以ての事

収ひ且ハ羈旅の難を以ての事  
旅之曉の事なきを以ての事  
を以ての事  
仍て其の事なきを以ての事  
字力何りての事

其餘下らざるを以ての事  
頂より其の事なきを以ての事  
其の事なきを以ての事



ひろみ入て滝の裏とありはう  
らみの籠と一付し付る也

暫時ハ流く物もや夏の時  
形頃の星とれとる所も知人あり  
是より物と想くしめても  
ゆくとすうらと一村をんし  
りよ雨降り日さるれ農家の家  
よ一表をりて印れい又路中

きりういし野のりあり  
星列のこいふけいれハ路中  
とこいしとさうらと物とれ  
いしすくわとれとけ路ハ横  
とわられとるくも旅人の  
ふとをうしあや一は北の  
のこす所とていふと  
一はめらとておる



伝とさしこししるすむら小堀と  
くまをかかむとさむられぬるの  
やとさむらたれと

うはねとハハきむ子のなむらむら

好て人里よむれハあさむと新  
つりよあむとさむらと

黒羽の館休浄坊ちやう一のきよ  
まむらとさむらとあさむらのむら

日新伝つりよ共才挑あさむと

まう朝夕あさむらとさむらのあさむ

とさむらとあさむらのあさむらと

さむらとあさむらのあさむらと

さむらとあさむらのあさむらと

古墳をさむられぬるハ幡宮と信

と市廂の的を射しむらと

と市廂の的を射しむらと



家木氏神正八丈とらるる  
此神社とくはとてはるる  
とらるるのまゝとてはるる  
宅一とてはるる

神驗光明寺とてはるる  
とてはるる者堂とてはるる

夜とてはるる  
高木雲とてはるる  
とてはるる

とてはるる

臥立横の五人とてはるる  
むとてはるる

とてはるる  
いつとてはるる  
とてはるる  
とてはるる  
とてはるる  
とてはるる



ふらぶくありきしきしきしき  
あふしね板きくきききき  
月のそ今ねきききききき  
橋をわきりしききききき  
さてふのねいっくのききき  
ふふふらのられハ石上の小菴  
窟ふふふふふふふふふふ  
けきききききききききき

木啄もふふふふふふふふ  
とふふふふふふふふふふ  
そふり殺生石ふり殺生ふり  
ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
らふふふふふふふふ

路を横くふふふふふふ  
殺生ふふふふふふふふ



石の毒なるくさしあかりんす蜂  
蝶のふくらむはらばらのさのふらふらと  
うさむりみくさるふらふらふらふら  
柳ハ世世柳の里ありて田の畔  
しあえは石の都守戸部某の  
し柳みとるやまとおくよのあし  
けしあふとくつこのあふよとさ  
しをいふは柳のふらふらふらふら  
さよりあられ

田一振揺しまきる柳うれ

心ゆくあふらふらふらふらふらふら  
のうらふらふらふらふらふらふら  
都一と使あしとみし中も  
そ開いと開のふらふらふらふら  
心をさむ秋風を身とあし  
みあふらふらふらふらふらふら



阿はれ也卯の糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき

卯の糸をかたしと開の  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき  
糸のほがよき糸のほがよき

子名城相馬三春の庄  
の地をさういふこと  
ま前をりよ今ハハ  
新くつとつと川の  
とつとつとつとつと  
先ハけの園い  
同長途のく  
風景よ統うり



断りてく〜し〜し〜し〜し  
風後のおちかくの田植  
きたよ〜し〜し〜し〜し  
狼き〜し〜し〜し〜し  
此右の傍より大さるる粟のまは  
ときめ〜し〜し〜し〜し  
ろふち〜し〜し〜し〜し  
あ〜し〜し〜し〜し

粟といふ文字ハ西の木とかして  
西方降きよはありといふ基き  
のこしを〜し〜し〜し〜し  
の〜し〜し〜し〜し

世の人乃んかぬふや軒の粟  
等竈の室を〜し〜し〜し〜し  
の宿と〜し〜し〜し〜し  
色〜し〜し〜し〜し  
とや〜し〜し〜し〜し



ふうつとほはまうと人々よるる水  
どしと知人みしはをる人い  
とむいふくことあつて目ん  
ふの徳よふりぬとおねりたるよ  
まきして黒塚のまをい見し

福崎よ宿ろあくれハちりすら松  
の石をとりちてまのけし  
ふことらほの小里よ石ままよたて

阿り里の童アのあつてまぬりの  
昔ハせとのとよ作しをはまの人の  
ままをあししてせんを誠信を  
まみりては谷よつまをせハ石の  
面トさようよしとままあ  
しとるしあ

早苗とらまておあまのつ松  
月の影のちとをて流のとと



とありしゆの佐藤左司の日記に  
たのらば一とすりしる飯塚の里  
跡跡とすりしるくりしるぬら  
しるぬらしるも庄司の旧館也棟  
と大手のたると人のたぬゆらよと  
て間とすりしるみこりしるのたると  
つ家の石碑をたがす中しと二人の  
娘よとすりしるせんも也たるとれいも

ういしるきりんの世もやえつらお  
うらと法をぬらぬ湊渡の石碑  
とさきしるよあすりしるよ入し茶  
をんハハもよ義経の太刀弁茶  
らぬらととすりしる什おとす

及も太刀も五月よとすれ  
其の憾

五月朔日のも也もお飯塚よとよ  
る温泉のれん湯よ入し家とよ



都より出でて、遠くまで来てありし  
さし、負ひて、灯し、ふり、ぬ、か、お、え  
この火、い、け、し、こ、ほ、あ、と、よ、う、を  
針、す、あ、ま、い、て、雷、鳴、り、雨、さ、り、あ、ま  
降、り、て、あ、ま、よ、ふ、り、も、あ、ま、あ、り、  
と、い、て、あ、ま、さ、り、て、眠、り、す、り、あ、ま、あ、り、  
お、り、り、て、消、入、り、し、り、え、短、あ、の  
さ、し、や、り、く、あ、り、し、り、又、旅、ま、り、  
行、お、の、余、宿、り、し、り、り、り、  
業、村、の、路、り、し、り、り、り、り、  
あ、と、い、し、り、り、り、り、病、え、あ、り、  
と、と、い、し、り、り、り、り、行、脚、捨、身  
無、常、の、観、念、道、路、り、り、り、り、天  
の、今、り、り、り、り、り、り、柳、り、り、り、  
路、經、横、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



是等の部へ入るは中お実力  
の塚へいつくのちと人ま  
くそちあさうしとゆららほ  
の里ともこのちとちとちと  
の結うしとのちとちとちと  
此の五月あふらいとちと  
あつれちとちとちとちと  
さうさうちとちとちとちと  
のちとちとちとちと

是等の部へいつくのちとちと  
ちとちとちとちと

是等の部へいつくのちとちと  
ちとちとちとちとちと  
のちとちとちとちとちと  
は師とちとちとちとちと  
下りし人ちとちとちとちと



の橋杭よりそよれをさるるのりうらむ何  
きはしやねハけしむ侍とさしと  
海もわ付くあらハ侍あさしハ極  
継ぎとさし少くすよ今将子巖  
のしらととのちひしてりくし  
ねのしらととのちひしてりくし

武深の杉女と申すと云ふ極と  
しらの侍ふさしりくねハ

梅より松ハと云ふと二月  
えん川を流して伝流し入あやめ  
ゆくりや流石をとりとめてはまら  
さるるす家より盡くわさつと云ふ  
けり御心あら若くはくしてあつ人  
しらとこの者よはひさしうらむ  
石とらを考ふ侍れとて  
一日案内り宮城野のす状はわ



あらして秋のうらさむやう  
 玉田よと稱つて一國ハばらと  
 鳴らぬ也日暮しりぬねの暮り  
 入て空をよめ下とさうさう  
 うく家ゆけきハとわさう  
 とうさうとハとみこれ業師を天紳  
 の流結るとおとさうハとねぬね  
 ね流流うさのあり畫うかてさ  
 思得の流結つけと草鞋  
 鳴けとハと風流のしき  
 うさうとむりて其美をみけ

物やちけ足とねん草の穂の結  
 への畫圖とさうとてさうりりハ  
 おくのあつたのら際と十善の  
 美と今も手と十善の美と  
 を個に國とてと献すとあり



靈碑 市川村多賀城ノ有

ノ石カハ高サ六尺餘横ニ丈計  
死古口と寧ノノ又字也四維國  
界之教里ととるノ此城神尾元  
年按察使鎮守府將軍大野朝臣  
東人之所望也天平宝字六年參  
議東海東山節度使同將軍  
惠養朝臣猶造而十二月朔日

と有聖武皇帝の時ノ古有  
むノノりノみもろノ松ノノ  
流傳ふといとも山崩川流てに  
びノ石ハ切て去るノ  
木ハ古てノノノノノノノ  
代々ノノノノノノノノ  
のノをノノノノノノノノ  
歳ノ記念今眼おノ古人の心



を園すり所の一箇ある命の  
収し竊旅の方とありて  
間も落るとも也

それより所田の玉川仲のふとある  
末乃松山へさきと道へ末松とあり  
松のありく皆蒙りくさくさねを  
うりて板をつつある松の末とね  
はくくのこことさくさくさくさく

垣すの海へ入おのうねとては  
ぬのを神くれて夕月夜遊し  
難く候もさくさくさくさく  
きくさくさくさくさくさく  
てさくさくさくさくさく  
いさくさくさくさくさく  
狂巻さくさくさくさくさく  
のさくさくさくさくさく



もあしひらひきら洞子ら  
よて枕らういしやうたれとこ  
うふ色土の遺風とれらあ  
しみ縁しうらう知時う  
のし神し信國守再自とれ  
て宮柱やうく彩椽うらや  
うし石の階ぬ奴しきり朔日あ  
やのむらうとしやううらぬめ

果葦土の境うく神靈あうし  
おしうらうふまふの風俗うら  
いと貴れ神あうちうくまむら  
うぬのうらうの向し又次う年祝  
うらう奇進とらう五つてまの侍  
今月の前うらうてうらう  
うらう渠ハ勇義忠孝の士也佳命  
今よむらうてきうらううらう



織人の道と勢をさすく  
ふくまここよとさうまをさし目就  
午よらうし船をりて松崎よわら  
其間二里除雄崎のゆらう  
柿をぬりうらふ松崎に杖棹木舟  
一の好風して凡河原西湖をぬす  
東南あり海を入て江の中一と里  
湘江の湖ときまふ流くのちと

あうて歌の天を指あすりの  
ちほよふ旬旬あうハ二とよこざり  
こ重よふとこたよわれ右よつ  
あう首うあり抱るあり足孫あす  
うとく一松のぬこよやく松葉  
改風よ吹くふあう屈曲あつ  
きあううう一甚ううう宵然  
うして美人の顔を粧ふらうや振



神のむし〜大とすまのるをらわさ  
うや造化の天上いつきの人の筆  
をふらむし 句をよみよさ

雄流の歌へ地つきて海をゆく  
流也すまぬ 禪師のふ空の流  
吹流石る〜る 将ねのふ流り  
世といふ人〜帰く〜はあ  
と流流れ〜る〜るあ〜るあ

菴同〜位あり〜いゝのり人〜ん  
そ〜れ〜ま〜る〜え〜る〜く〜え〜る  
か〜し〜月〜海〜う〜つ〜り〜て〜昼〜の〜ら〜あ  
又あ〜る〜ま〜じ〜江〜上〜と〜ゆ〜り〜て〜空〜を  
ゆ〜れ〜ハ〜空〜を〜ら〜く〜こ〜に〜階〜を〜伝〜へ  
風雲の中〜と〜流〜ら〜れ〜る〜ら〜る〜ん  
あ〜や〜し〜ま〜ま〜して〜あ〜る〜ら〜ん〜は〜せ〜ら〜れ  
松崎や〜流〜れ〜る〜を〜れ  
か〜し〜く〜ふ〜る



予ハ口を閉じて眠んとして  
らるるに四房をとりて一時  
松林の待ありるふ安適にう  
とすの心身を静くして  
こころのなごみと杉風湯より  
あつたあり

十一日瑞雲寺に詣りて  
世の昔より修業の卒にありて

入る切羽の厚閑とす  
雲が禪師の法化に依りて  
夢ありて金壁に莊嚴を  
仏土成就の大伽藍と  
彼見仏聖のふいつく  
十一日平初泉とありて  
松林の待ありて人跡稀  
と雉兔菟菫の松ありて



とわたりし路少きし  
石の巻といし漆よかこねあは  
とらみしなまらぬ金花と海と  
見やし數百の廻入はよつと  
ひ人及地をいしうむし電の  
煙をうしきりこいしうやうや  
下よしまれのやとちんといれ  
こらよちん人しし海と  
小室よ一おをいししつね  
みそあはまがひし神のちあ  
尾ゆらの牧よのきりし  
めしきりしあさららんはまりし  
ましはよらうしし戸伊たし  
一室して平泉よあら其間  
余里らしし少らぬ

三代の業耀一膳の中し



大門の江ハ一里の間に有る  
うは田原に居て金鷄山の  
形をみたり先づ館より其  
水上川南部より流る大川也  
衣川の和泉に城を築き其  
の下より大河に流入康衡亦  
旧治ハ衣川に居て南部口  
を以て學女夷を始とみたり

備し義臣より此城より  
こり功名一時の最とるに因破  
きて山河あり城春より草  
をみたりと笠井を以て其の  
ついでに河を流るにありぬ

衣川にありて其の位

邦の系より其の位

蓋て其の位より其の位



す徑堂ハ三將の像との〜  
光堂ハ二侍の権を弼のとの〜  
佛と安置す七宝を〜  
殊の扉風ややき金の櫃、  
雪よ移して既顔廢て虚の最  
と成くを四面新く圍て落  
を霽後て風るを法物付手威  
の託念と云ふなり

五月の頃の〜  
南戸道き〜  
里と伝ら小〜  
さしてある〜  
さう〜  
此路諸人傳〜  
開〜  
関を〜



日鏡いさるるれん封人のあはるる人  
うけし念をいむる風ぬれ  
てくちのこころ中へはるるる

春風ちの尿すまはれと  
何のこころより出羽のこころ  
火をほめてるこころのこころ  
れはるるるの人をたてぬ  
こころのこころのこころ人

おちれは宛書えのる者反振振  
をぶるるる櫻の杖と推方てはるる  
えよふてりるるるるる  
るるるるるるるるるる  
辛きこころをましてほよついで  
りはるるるのこころのこころ  
森とこころのこころのこころ  
下園ありあはるるるるるる



雪知らしつらぬ心比し  
露の中踏ふく水をわたり  
よ踏し肌よつめしこ汗を流  
しと衣上の庄よお川よの  
葉内とよみのこめやせみら  
か不用のころききあつて  
まじりやしてはなとらとら  
こしぬぬよちてく物こく

なり也

尾不澤しと清風とと者とる  
ぬきこはあつたのふれと  
うす都しおとらとらとら  
すよ露の情もし知れは日比  
こめしと途のしらとらとら  
りしとらとら

雪知らしつらぬ心比し



遠出よふいおつ下のひまのぬ

よふえを待ひてお影のふ

稽古する人ハ古代の千の<sub>あま</sub> <sub>あま</sub>

山形傾くま石まるとらまはり

意覺大師の同基くして御法

閑の比也一見すくま一人

のまもくして後て鬼もはく

こつてはく一共同七重まり也

目いまくまもく一林の坊ま宿り

まて山上の堂まのまらま

と殿と重てまく一和栢手回

土石たてま借ま石まの院

扉を閉ておのまくま

まめくまをまてま

佳景ま寂ま

閑まゆま



家上川のほと大石田とあり  
日初を行宮より古きと離譜の程  
とわかれてふれぬあのみとこ  
ひ草ノ角つあつらのつとやりにちや  
はるよさらありて新古や  
道よあみまうふとさうとみら  
きるくこら人一とけれとわり  
うさ一巻あつたこのつらの風流  
空とあつちり

家上川のほとりのつらとつら  
と水ととつらとあつちり  
あつちりつらとあつちり  
と流て果ハ酒田の海に入た右  
霞ひあつちりの中とあつちり  
とあつちりつらとあつちり  
白糸の流ハ昔葉の流くあつちり



凡人を岸より修てきよむるに  
まつてふあやう

五月廿五日ついで早一と云ふ

六月三日羽黒ふらむてら圖司た吉  
とと者をもとむて別ち中代今もえり

園利の福す南谷のふ流り  
今一は憐愍の情にさやうと  
あうと

口日本はをわて誹諧具り

有難や雪とふらす南谷

五日権現の詣當山同禰能除

大師のついでの人とさやを

ととて延喜式に羽列里山の神

社と有書寫黒の字と里山と

ふとらとや羽列黒とと申候

て羽黒ととととや出羽ととと



鳥の毛羽と此國の貢物と  
轍と  
風土記に  
ついでに  
月と海  
と合して  
三つと  
當寺  
長江  
東  
敵と  
属して  
天台止  
觀の  
月明  
らるる  
因縁  
融通  
の法  
の灯  
しけ  
るは  
僧坊  
棟と  
るは  
修験  
行法  
を勵  
して  
冥土  
の靈  
地の  
縁  
如人  
貴思  
らる  
繁榮  
の長  
くし

ついでに  
備けし

八日月と  
のらる  
本邦  
をあら  
よ引け  
冥府  
の路  
を色  
強力  
とる  
のよ  
らる  
いれ  
て雲  
霧と  
氣の中  
よ氷  
雪と  
踏  
ての  
らる  
中八里  
より  
日月  
行居  
の雲  
圓  
よ入  
ると  
ちや  
ちれ  
息  
終  
る  
と  
頂上  
と跡  
水と  
日没  
して  
日  
影  
ら



毎と浦の隙を杖として却て  
つらと夕日をして空はほそくと  
得るはくく

谷の侍は鋳流の陸とるをそよぶの  
辨は雲水と撰く空を潔く  
しと釵を打ね月山と銘を切  
し世は貴きらん彼龍泉よ剣  
を淬とふや干将莫邪のむしを

そよ道よ塚独の瓶あさくぬ  
中そよれをりきく種くをうて  
とりーやすぬあこと尺をりあ  
梅のつらとまらひくやるありあ  
積雪のりくけして春をこたれぬ  
とよみくのあかりあき  
梅はさきくあきくくくく  
傍正のそよのえしとまきよいこちて



飛つていそぐのせうせう中の  
激ぬり者の法式として他言  
すを移す仍し言ひていそぐ  
坊にゆれし何國國の常上候と  
とと源礼のうと縁用とす

清一やちのき月のおとら  
雲のきりまけいあし月のみ  
信しとぬほぬよぬと候な

ゆきと流るむねの同くは  
羽黒とて鶴の園のゆとせし  
氏重行とて木のぬのうとむく  
られて誹傳一とて右左吉とて  
さうぬ川あしとてし源甲の漆  
とてと別居を玉とて鷹師の作  
とて右とて

いそぐとて吹浦とてしみみ



暑き日は海より雲より霞より  
江より陸の風をぬきぬきぬき  
今家ほりて方と貴河内の子  
より東北のふらりと雲を待て  
いこころをみたり其際十里の  
やかきくは改風を初と上  
雨朦朧とくし多海のしんく  
園中より雲化して雨とみ奇せと

き江雨後の晴色は彩鳥を  
のびぬと膝をいもくし多の  
を初と初天の雲を初と初と  
やうとくし出ると初と初と  
くふと初と初と初と初と  
らき雲の初と初と初と初と  
岸より初と初と初と初と  
くふと初と初と初と初と  
梅のたよ初と初と初と初と



の行人念ふものこと江上より西陵  
河内神功后宮の清墓とて  
と干満珠とていふよち  
ありし中とていふすい  
中よやせきものさよよ  
なるといふ風よ一眠の  
あそし南とて海天を  
具にさして江のあり西の

の閑路をさり東に流を築て  
舟田よとて海北よと  
えと流ありとていふと  
え江の縦横一里とて  
いふて又異なりねと  
如く象深といふと  
はよとていふとて地盤  
をわとていふと



象深や雨くぬ絶縁のふ

以神や勢ほいおとし海原

みられ

象深や軒理にくふ神一糸

とく

このふの商人徳耳

象のふや戸板をたかして又 流

岩上ニ雕鳩の堂ありて

とく

はくぬぬありてやみさこの象

酒田の余はりりと會して陸田の

手よらと遠くのありし物をと

やしめくし加賀の府をてし百世に

とや嵐の園をとくゆきとえ海原

の地とまうりてててててて

ふしゆりの園より到らけり九日

暑湿のさうしゆをさうしゆ

初めありてやをさうしゆ



ふ月や六日に夢のちのちの

荒海や休後よとよふ天の

今日ハ親しき子とてはたし

新みしき北國一の羅布を

引つれなれと捲引しき

舞しよ一問答して面をさ

ふさ甘のあうこ人斗とこ

手たしよみのこのふまし

お清しきよけのこほのぶ

浮とふおお女高し行路

するしよ同くしみのこ

ちすハ右のしきりく

とふふしよいぬる

のよふるけしき

ぶふのこのせとあ

ふふしよいぬる







ぬ川をわたりて那古と云ふ所  
に擔籠の者に出る春のついで  
初秋の言とあつさりあつと  
人よるれとこより五里いろ  
ほひーてもよめのと陰よよ  
空のせらあつこくすくすれえき  
の一夜のちるよりのあつと  
つらをとれれここの國に入

とせの香や

ふ入右もさあめ  
ちのあつらりこく谷をこし  
今ほは七月中の五日し  
大坂よりよ商人に處と云者  
さき水うたがわとこ  
つ笑とこりのハせり  
ふのくこせし世の知人と  
しきくのかをよ



其見進つるを信す

塚と物げ、家ほまゝの好風

あつちのりやうりれし

秋涼くも毎しむげや血茄子

途中 喰

何と目ハ難句しあまの風

あつちとあつち

まじりきいぬわお吹吹

此不木田の神社ノ前より如鳥の  
甲冑の切ありは芳原氏ノ  
属一は義朝ノ子なりと  
とうやうし平士のりのこあり寸  
月庇より吹ぬ一まじり  
のりのりの金をとらぬめ龍江  
うみ形きりし蓋討死の后  
木常義仲のありくそは社



しつめくれつてー 極名の地を  
う供をー 中一丸よのあつあ  
縁紀ろーみくろ

むんぢなる甲の下乃きりくす  
山中の湯泉ろりりちと白根  
う山嶽ろりーみるろりー 阿のむ  
丸のら除く観音堂ありふ  
山のほきー三十と下の吹れ

とるさととわいてほ大無大悲  
の像と安曇ろりーわいて那谷  
と名をのよとや那智谷組の  
と字をわろりろりーととと  
石とさくー古松極ろりくく  
草とゆきの小堂と岩の土  
まらろりーみねの土成し  
石と乃石ろりろりー秋の風



温泉ノ浴ヲ其功有明キ事  
ニ

山中や菊ハ花をみよぬほの白

つら〜とてふ物ハ久年ニ神と

いよ〜水童〜し〜れ〜又譚諧と

好〜浴ノ貞室〜み〜年ノ心〜

〜多〜よ〜あり〜以風報〜と〜得

め〜れ〜て〜終〜つ〜ゆ〜て〜貞室ノ心

じ〜あ〜り〜て〜世〜よ〜と〜ら〜ら〜功〜名〜の

及〜一〜村〜判〜行〜の〜料〜を〜信〜と

と〜今〜又〜む〜し〜信〜と〜は〜ら〜り〜ぬ

普〜良〜ハ〜腹〜を〜物〜て〜伊〜勢〜の

国〜も〜終〜と〜ま〜お〜ら〜ぬ〜り〜あ〜れ〜ん

先〜き〜て〜り〜

り〜く〜て〜ま〜あ〜れ〜休〜と〜と〜村ノ原

と〜あ〜ら〜る〜り〜り〜の〜あ〜ら〜る〜



おりのいゝくす隻鳧のちん  
雪ふりやうあゝ〜〜〜

今日ありやすけはえんきあり

大聖おの城介全昌寺とらふ  
ち〜り〜とるら 狩加賀の地  
言さふもあのを言はるるはくし  
流雲秋風やや〜のこ  
こおす一巻の扇あつこ〜

昔も秋風をよめ〜  
外へ明りのや〜  
あつすむ〜 鐘板鳴りて

食堂う〜入りよハおふの国  
〜心の幸〜  
下〜と〜  
〜  
おそんよ中の柳〜



上座掃てあくるやちこしお柳  
とりあへぬさきしりてさき鞋ふ  
うしゆかたに細ふの垢を落  
の入しをさきし掃りてけけ  
切のねをさきし

あきりのうらみはけをさきし  
月をさきしはけ切のねをさきし  
此一首しりてお系あきり

一辨をさきしりのハを切のねを  
さきしり

丸団天龍寺の長老ちき団  
ちきちきちきちき又金沢のちき  
ちきちきのちきちきちきちき  
ちきちきちきちきちきちきの  
丸系おさきしりちきちきし  
お系あきりちきちきちきちき



つゆ今就あしらみし

おかしく願ひし余成

五十二より入て永平さるれ

す道之修師の忠孝や邦様

ふ里を遊てくくく修し

此をのしりあも貴きゆ

あしとく

福井ハニ里計るれんく又 阪

きしめてきくくくく水の

路しきくくく等裁とく

たき隠士をいつ事の手し

けしききりてきききき

十とを解りしいききき

てききく將死ききき人

あられといきききき

うくくときぬ也市中い



引のてわ平一のわあしくたは  
ゆるさのこもこしりて影は  
あしよんちをくすまふ  
はうらうらとちをたを儀  
うらうらあてらつたり  
わらわのよるのちたわあ  
はあめりやしりりりり  
めりりりりりりりりりり

うらあめりりりりりり  
むしりりりりりりりり  
わらわのちりりりりりり  
えのちりりりりりりり  
名月いつりりりりりり  
きりりりりりりりりり  
ゆるりりりりりりりり  
おしりりりりりりりり



うく水て比那うらまあうらま  
あまむつの橋とわらわしあね  
の蓋ハ物くーあうらうら  
の甲ととてほむほむと  
あむく煙う城うらあ  
うお厚とけくナ字の  
あれつてそのほくー宿と  
うらむらの夜月ぬるう

あまのあしうらまうら  
うらつて越路のあまのわらわ  
のほむらうらうらうら  
うらうらうらうらうら  
うらあまうら仲哀天皇の御  
廟也社頭神とて松の木  
の洞し月のみあ入まうら  
の白砂冢をまうらうら



往昔遊り二世の上人大邪  
教起のりりてらつて至  
を以て土石をとりて泥滓と  
うけりてふ信は斗の如  
うし古例今もしる神前  
とて砂をとりてりふれと  
遊りの砂おとすゆくと亭に  
のりりてら

月信一遊りのりりの上  
ナハり亭さのりりてらつて  
西行

名月わ小園日小定くあり  
ナハり亭とみもやまをほの  
小貝らりりと種のほとを  
とて海よ七里あり天庵に某  
とてりの破鏡小竹ありてら



やうきもくしりた方僕あま  
あしきりのそく上風町の  
あしきりあむ信ハあし  
あし海士のあまあしきり  
あしあまあしきりあまあし  
あしあまあしきりあまあし  
あしあまあしきりあまあし  
あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし

あしあまあしきりあまあし



し如行々家々入集るの事  
川子新の父を其ふかき  
まへ人の目と想とさへて候  
生のおのちあつては且  
悦ひ思らるる旅のおと  
ちとさへいふさへは月  
ちとさへいふさへは月  
おんといふまゝのち

吟の  
あつては  
わんたり



此一書ハ芭蕉翁奥羽ノ紀行アリ  
素竜ノ筆也書ハ縦五寸五歩横四寸  
七歩紙ノ重ハ十二首尾小白紙ト加小  
外ハ素龍ノ故ト今畧行成紙ノ表  
紙紫乃糸糸銀金ノ表紙トシ  
る白地トシたぐのやろ乃と自筆ト書  
て瀧身ト書不遷化ノ後門ト書  
行ト書又志ノ蹟ノ書門ト書  
行ト書



今昔集の甲辰のく様厚のく秋の也  
まのく集の移り書に冬季のく相透のく

京寺町二条上町  
井筒屋唐多景板



八



